

# 「よくなる」の用法 —学習者の誤用を防ぐために—

日本女子大学

江田すみれ

## 1 はじめに

「よくなる」と「てくる」は誤用が見られる形である。教師用指導書でも参考書でも説明は書かれている（市川 2005、安達 1997）が、再度コーパスから得られたデータをもとに誤用の原因を探ってみたい。

## 2 先行研究

### 2.1 「よくなる」

安達（1997）は「よくなる」は「状況が進展的に変化していった埋め込み節で表される事態に至った」ことを表す(p.80)とし、埋め込み節には

- 1) 進展性を内在していない事態
- 2) 意志的でない事態

がくるとしている（p.81）。進展性を内在する動詞は「てくる」によって進展性を前面化するのに対し、「よくなる」は進展性を持たない事態に進展性を付与する形であると述べている。

？ (1) 私はだんだん疲れるようになった。

(2) 私はだんだん疲れてきた。（例文 1-8 安達 適不適の判断も安達による）

安達（1997）は（1）のように進展性を内在する動詞を使った場合は複数の事態による習慣の定着としてなら許容されるとしている。同様に 2) の事態が意志的であるか否かについても、

(3) 私は本を読むようになった。

は習慣が身についたという意味でなら許容されると述べている。

進展する事態（状況）は主体の意志によってコントロールされない事態であり、以下のようなものがあると述べている。

- 1) 非情物を主語とするケース

(4) 冷戦が終わったあとは経済問題が大統領選挙の行方を左右するようになって  
いる。

- 2) 受動文によって対象となる非情物を主語に昇格するケース

(5) サッカーの愛好者の姿が見られるようになった。

- 3) 可能文によって表されるケース

(6) 日常会話がようやく話せるようになった。

- 4) 思考動詞

(7) 「これからが大変だ」と思うようになった。

5) 複数の出来事によって表されるケース

(8) ずいぶんいろいろな客がやってくるようになった。

庵(2000)は「ようになる」は「それまで存在しなかった状態が現在は存在することを表す、とし、意志動詞を使っても意志的な動作を表さず、自然にそうした状態に至ったことを表すとしている(p.75)。

市川(2005)は「ようになる」は「状態の変化」、つまり、「時間をかけて習慣・能力が身につく」という意味合いを持つことが多い(p.240)と述べている。そして前接するものについては、「ようになる」は意志動詞・無意志動詞どちらにもつき得ると説明している。初級を教える人のための文法書であることから、「時間をかけて習慣・能力が身につく」という身の回りのことを述べる説明にしているのであろう。

以上、安達は「事態の進展」、庵は「これまで存在しなかった事態の存在」、市川は「状態の変化」特に「習慣・能力が身につく」という表現で「ようになる」の意味を表している。どのような表現で「ようになる」の意味を表すのがもっとも理解しやすいのだろうか。また、安達(1997)では埋め込み文の性格まで述べられており、参考になるが、テキストの種類の違いと「ようになる」との関係について更に調べてみたい。

## 2.2 日本語教科書での「ようになる」の扱い

植松(2012)は日本語教科書、文法解説書における「ようになる」の例文を集め、その結果を以下のように述べている。

前接する動詞の形では表1のように可能の意味を表すものが85%を占め、辞書形は15%にとどまっている。

意味の上では、植松は教科書に現れた例を「技能の獲得」「慣れの獲得」「環境の変化による利便性の獲得」「習慣・傾向の変化」の4つに分類し、技能の獲得が67%と多いこと、「環境の変化による利便性の獲得」が7%と少ないことを示している(p.33)。

初級教科書は埋め込み文が可能表現、意味としては技能の獲得、とかなり偏った教え方をしていることが明らかになった。実際の日本語母語話者の「ようになる」の使用はどのようであろうか。また、学習者はどのように使っているのだろうか。

前接する形	例数	%
動詞の可能形	61例	80%
「わかる」	4例	5%
動詞の辞書形	11例	15%
合計	76例	100%

意味	例数	%
技能の獲得	51	67%
慣れの獲得	9	12%
環境の変化による利便性の獲得	5	7%
習慣・傾向の変化	11	14%

## 3 調査方法

「ようになる」について、学習者と日本語母語話者の使用状況調査を行った。

学習者の使用調査は、『日本語学習者作文コーパス』を用い、文字列検索で「ようにな」で検索をかけると同時に原文を読み、正用・誤用・非用ともに取り上げた。不要な例は削除して用いた。

日本語母語話者の使用状況調査は『CASTEL/J』の新書コーパスと『BTSJ 会話コーパス』によって行った。新書は、学習者が大学に入った場合、最初に入門書として触れる可能性のある書物であることから調査対象として選び、科学的な文章コーパスとして扱った。社会科学と自然科学のテキストを対象とした。会話は『男性のことは職場編』、『女性のことは職場編』、『BTSJ による日本語話し言葉コーパス』を用いた。

検索ソフトは Key Word In Context(KWIC)Ver.3.29e を用いた。

資料は表3 表4 のとおりである。語数は文章作成ソフト Word の「情報」ウインドウに表示される語数でカウントした。

資料の語数が会話と科学的な文章で異なるため、出現数に関しては1万語あたりの割合で考えた。

コーパス名	語数
日本人の法感覚	100,107
近世の日本	106,224
日本の企業発展史	154,316
進化論が変わる	99,642
睡眠の不思議	89,687
科学とんち問答	103,894
時間の不思議	99,837
合計	753,707

コーパス名	語数
男性の会話職場編	166,228
女性の会話職場編	205,795
BTSJ会話	441,831
合計	813,854

学習者の使用については、「ようになる」はすべて原文で

文脈を確認し、正用・誤用の判断をした。その際、全文を読むことになったため、「ようになる」を使うべきところに使っていない例は非用として採用

した。

非用として採用した例は以下のようなものである。

(9)もしあなたの外国語がうまくできたいならおしゃべりな人になるはずだ。

(KG022)

上の例は以下のように解釈した。

(10)もしあなたの外国語がうまくできるようになりたいならおしゃべりな人になるべきだはずだ

## 4 調査結果

### 4.1 「ようになる」の使用状況

科学的な文章と会話における「ようになる」の出現状況を調べたところ、表5のようになった。「ようになる」は会話より科学的な文章でよく用いられていることがわかる。

森(2011)が BCCWJ コアデータを使って文法項目の使用頻度を調べているが、それによると、「ようになる」

	科学		会話	
	例数	割合	例数	割合
ようになる	179	0.02%	40	0.00%

は0.001%とのことなので(p.66)、それと比べると今回の資料は科学的な文章も会話も使用頻度が高い。

## 4.2 「ようになる」の意味

植松(2012)を参考に科学的な文章と会話における「ようになる」の文の意味を考えてみた。その際、「技能の獲得」と「慣れの獲得」は区別が難しいのでまとめて「技能の獲得」とした。植松(2012)で「習慣・傾向の変化」とされている区分は、科学的な文章では習慣・傾向とは限らない変化が見られたので、本稿では「変化」とした。

(11) そこで、世界共通の系統的でわかりやすい命名法が制定された。それが IUPAC (国際純粋応用化学連合) 命名法である。この命名法により、カルボン酸の仲間は、たとえばギ酸はメタン酸、(中略)というように、その出発となるメタン系炭化水素に「酸」をつけて呼ぶようになった。(化学とんち問答)

(12) 諸大名の幕府への臣従は、軍役・普請役の奉仕のほか、人質として妻子を江戸に居住させることや、江戸への参勤交代をつとめるという形で示されるようになる。(近世の日本)

先の表2では、初級教科書での「ようになる」の例文は67%が「技能の獲得」の意味で提出されているとのことだが、科学では「技能の獲得」は5.6%である。会話では32%と多少多いが、「ようになる」の意味を「技能の獲得」として提示する日本語教科書は、書き言葉に関しては十分な情報を与えていないことになる。会話においても科学的な文章においても、「ようになる」の基本的な意味は「変化」である。

	科学		会話	
	例数	割合	例数	割合
技能の獲得	10	5.6%	13	32.5%
利便性の獲得	9	5.0%	6	15.0%
変化	160	89.4%	21	52.5%
合計	179	100.0%	40	100.0%

## 4.3 「ようになる」の埋め込み節

安達(1997)の分類を参考に本稿でも埋め込み節を分類する。安達(1997)の分類は

- 1) 非情物を主語とするケース
- 2) 受動文によって対象となる非情物を主語に昇格するケース
- 3) 可能文によって表されるケース
- 4) 思考動詞
- 5) 複数の出来事によって表されるケース

であったが、上の分類法は1) 2)が主語を問題にし、3) 4)が述語、5)が出来事、と基準がまちまちである。本稿では埋め込み節の述語という基準で整理しようとする。

本稿では埋め込み節の述語が

- 1)無意志表現
- 2)受け身

- 3)可能表現
- 4)思考動詞
- 5)意志表現

以下にそれぞれの例をあげる。

(13) 遺伝子が、突然変異によって再びはたらくようになったとも考えられる。(無意志表現)

(14) 断続平衡説は、あつという間に広く知られるようになったのである。(受け身)

(15) 複雑なものを複雑なものとして理解するようになった、一般民衆の精神的成長を示している(可能)

(16) 生活レベルの向上にマッチした賃金要求を少しは考慮するようになった。(思考動詞)

(17) 高温で飼育すると、水中で交尾や産卵をするようになり、卵はそのまま水の中で育つために、オスは卵を養育する必要がなくなる。(意志表現)

(13) のように動詞自体は意志動詞であっても文中では無意志的に使われている例が見られたため、意志動詞・無意志動詞という語ではなく意志表現・無意志表現という語を使った。その結果が表 7 である(4)。

表 7 を見ると、会話と科学的な文章では埋め込み文の述語が異なることが分かる。

会話では可能表現を使った例が 55%、意志表現を使った例が 25% であったのに対し、科学的な文章

	科学的な文章		会話	
	例数	割合	例数	割合
無意志表現	27	15.2%	5	12.5%
受け身	74	41.6%	1	2.5%
可能表現	23	12.9%	22	55.0%
思考動詞	4	2.2%	2	5.0%
意志表現	50	28.1%	10	25.0%
合計	178	100.0%	40	100.0%

では受け身、意志表現、無意志表現、可能表現という順であり、科学的な文章では埋め込み文が多様である。特に、動作主を背景化する受動文(庵 2007 : 104)が多いことは科学的な文章ではうなずける。

初級教科書で「ようになる」が可能表現に接続すると教えることは、初級では会話ができるようになることを目的としていると考えれば、意味があると言える。しかし、中級以降、書き言葉を学ぶ場合は「ようになる」の埋め込み文はもっと多様な表現を教えなければならないことがわかる。

## 5 学習者の「ようになる」

### 5.1 学習者の「ようになる」の使用状況

学習者作文コーパスを用い、「ようにな」で検索をかけた(2)。それと同時に全文を読み、「ようになる」が必要と思える文を書き出した。その際、ナ形容詞・イ形容詞の文、「～のようになる」のような例示の文は排除した(3)。その結果を「ようになる」に関する誤用、「ようになる」が不要な例、正用、アスペクトなど別表現の誤りと分類した。その結果が

表 8 である。それぞれの例を挙げる。

・「ようになる」に関する誤用例

(18) 併し毎日日本語を教えられるとだんだん親しく感じられた。

(感じられるようになった) (KG019)

(19) 文字を避けなかったことに意味がありました。その後からは、日本語で書いているのは全部避けず、読むことになりました。(読むようになりました)

(KG049)

(20) 地図などのリンクもすぐ手に入れるようになった。(手に入る) (CG129)

「ようになる」に関する誤用には(13)のように「ようになる」が必要な誤用、(14)のように「ことになる」でなく「ようになる」を使う誤用、(15)のように「ようになる」の前の述語が他動詞でなく自動詞を使う必要がある誤用などがみられた。

・「ようになる」不要

(21) そのけっか大学も日本語をせんもんでせんたくするようになって、日本のりゅがくもかんがえることができるりゅうだ。(選択した。) (KG001)

(21)の学習者は大学の専門として日本語を選択し、日本に留学した、という文を作っていた。この例では「ようになる」は不要と判断した。

以上見たように「ようになる」の文のうち、誤用は全体の 28%ほどを占めており、学習者にとって「ようになる」は難しい表現であることが分る。

以上のように、学習者は「ようになる」をどのような場合につけるかがよく分っていないようである。

表8 学習者の「ようになる」の使用状況

	使用数	割合
ようになる関係	20	14.3%
ようになる 不要	19	13.6%
正用	96	68.6%
アспектなど	5	3.6%
合計	140	100.0%

## 5.2 学習者の「ようになる」の埋め込み文の述語

学習者の作った「ようになる」文の埋め込み文を、正用も誤用も合わせて表 7 の基準で分類した。

可能表現を使った例が多いことが分る。日本語母語話者の使用状況(表 7)と比較すると、母語話者の会話では可能表現が 55%であり、その数値と似た傾向を示している。しかし、『日本語学習者作文コーパス』は科学的な文章で取り上げるような話題で書かれているため、できれば多様な述語が使えた方がいい文章である。今回の結果は受け身が使えていない、意志表現の使用がやや低いなど、科学的な文章の「ようになる」の数値とは異なっている。

表9 学習者の「ようになる」の埋め込み文の述語

	使用数	割合
無意志表現	17	12.1%
受け身	4	2.9%
可能表現	85	60.7%
思考動詞	7	5.0%
意志表現	27	19.3%
合計	140	100.0%

次にこれらの埋め込み文の正誤を見てみよう。表 10 のように、受け身・思考動詞は使用

例が少ないが、使えた場合は正用である。可能表現は使用例も多く、正用率も高い。それに対し、無意志表現を使った例、意志表現を使った例では正用率が50%程度である。

以上の結果から、学習者は受け身が埋め込み文になっている「ようになる」文はまだ十分に

使いこなす段階には至っていないが、教室で取り上げれば理解し、使えるようになる可能性があることが推測できる。それに対し、無意志表現を使ったもの、意志表現を使ったものは理解しにくい可能性がある。

	使用数	正用	正用の割合
無意志表現	17	8	47.1%
受動文	4	4	100.0%
可能表現	85	67	78.8%
思考動詞	7	7	100.0%
意志表現	27	14	51.9%
	140	100	71.4%

## 6 分析と考察

以上見てきたところから次のような点が問題であるということが分った

- 1) 学習者はいつ「ようになる」を使うか、どんな時は使わないかが分っていない。
- 2) 学習者にとって、埋め込み文が無意志表現、および意志表現を使った場合が難しい。これらについて考察していこう。

### 6.1 「ようになる」が必要な例

「ようになる」が必要だと判断した例とその理由を述べよう。

「ようになる」は短時間に起こる変化ではなく「状況が進展的に変化していった埋め込み節で表される事態に至った」ことを表す(安達 1997 : 80)とされるように、継続的・恒常的な変化(庵 2000 : 78)、次第に変わることを表す。そこで、以下の点に注意する必要がある。

#### 6.1.1 変化として表現すること

(22) そして、おひやの意味も分からなかった。やはり、日常生活でよく日本人と話さないとだめだ思っている。(思うようになった)(CN005)

(22)は日本語教師をしていた中国人学習者の文で、ある時日本人とよく接触している人に日本語について質問されたが、その質問に答えられなかったという経験を述べ、やはり日常生活で日本人と話さなければいけないと感じた、と続け、日本に留学して更に勉強したと述べている。

中国語では「発話時を基準とした時間的位置」あるいは時間を表現する副詞によってテンスが表現される(木村 1982 : 19-23) そうであるが、このようなテンスの表現の仕方をする言語はいろいろあるだろう。こうした言語の話者にとって変化の表現は使いにくいことが想像される。特に、時間を表現する語が表面化されない場合は注意が必要であろう。

変化したことを述べる場合は「ようになる」を使い、変化であることを明示する必要がある。

### 6.1.2 「ようになる」を要求する文型の存在・文法規則

(23) 言語の中には単なる言語的なきそくや文法だけがあるのではなくその国の社会や文化をして歴史などが入っている。それでその国のドラマとか歴史などに興味を持っていると前よりおもしろさを感じて実力もその国の知識も両方うまくできると思う。(実力もつき、その国の知識も得られるようになると思う) (KG003)

(23)は「～と～なる」の文型を含んだ文である。必然を表す「と」の文の後件は「～になる」のような変化を表現することが多い。(23)は「と」の文法的な性格が「なる」を要求した例であろう。

(24)もしあなたの外国語がうまくできたいならおしゃべりな人になるはずだ。(できるようになりたいなら) (KG022)

(24)は「たい」が使われている。「たい」は「できる」のような状態動詞には接続できない。「たい」に動詞を接続し、それを「たい」の形にしなければならない。その文法的な性格により、「ようになる」が必要になる。

(25) できるようになりたい

「ようになる」のような形を要求する文型があることはわかったが、どの文型であるか、はこれから調査する必要がある。

### 6.1.3 副詞あるいは文脈の存在

(26) インターネットの便利性\*はもうよく分かっていたが、だんだん新聞などは必要だと思ってなった。(思うようになった) (CG107)

(27) 併し毎日日本語を教えられるとだんだん親しく感じられた。

(感じられるようになった) (KG019)

「ようになる」はその継続的变化という意味から、「次第に」「徐々に」「だんだん」などの副詞と共に起しやすい。逆に、これらの副詞が文中にある場合は「ようになる」を使った方が文として落ち着く。(21)(22)はそのような例である。

(28) 情報が大量に迫ってくると、その中にある意味、それにもたらされた結果もほぼ関心をもらえない。(人々は関心をもたないようになる) (CG141)

しかし、徐々に進む変化、継続的な変化は必ずしも副詞とともに表現されるとは限らない。(28)のように文脈で時間をかけて変化が起こったことが表現される場合がある。そういう場合も長期間の変化を示そうとしているということを学習者は意識して「ようになる」を使わなければならない。

### 6.2 「ようになる」が不要な例

「ようになる」が不要な文に「ようになる」を使っている例も見られた。

安達(1997)は「ようになる」構文に埋め込まれるのは 1)進展性を内在していない事態、

2)意志的でない事態と述べ、意志的動作を表す事態は複数の事態による習慣の定着としてならば可能としている(p.81)。この制限にあてはまる例が見られた。

### 6.2.1 一回性を持つ意志的な事態

(29) 日本語を何も知らないじょうたいなら日本にくるのをまよったかもしれない。でも私が日本語を知っているから、しんばいしないで日本にくるようになった。(来た) (KG079)

(30) 私が日本に関心を持っていたきっかけは高校生の時ほかの科目より日本語がやさしいだと思って、ほかの科目より勉強をたくさんしたことがあるだから。そのけっか大学も日本語をせんもんでせんたくするようになって、日本のりゅうがくもかんがえることができるりゅうだ。(選択した) (KG001)

(29)(30)共に、その時だけの一回性を持つ事態を表現している。つまり、ある時あることをした、あるいはある決断をしたことが述べられている。これらの例は、(29) は日本語学習をし、その結果日本の留学を選んだこと、(30) は高校の時日本語の勉強をよくした結果、大学の入学に際し、専門として日本語を選んだことを述べている。どちらも書いている学習者にとっては時間のかかった事態なので「ようになる」を使ったのであろう。しかし、(29) は「日本に来た」こと、(30) では「日本語を選択した」こと、という一回性の事態を表現している。このような一度だけの事態では「ようになる」は使えない。「ようになる」は時間をかけて変化が起こったことを表す時に使う。高橋 (2005) が「完成相のもつ基本的なアスペクト的意味は動詞のさししめす運動 (動作または変化) を、(その運動のはじめからおわりまでをひとまとめにして) まるごとのすがたでさしだすことである。」と述べている (p.80) が、まるごとの事態にあたる使い方と言えよう。

意志的な動詞は一回性の事態を述べる時には「ようになる」が使えないということは明示的に示す必要があるが、初級の教育ではそのことには触れられていない (植松 2012) (5)。

### 6.2.2 進展性を内在している事態

進展性を内在する事態には「ようになる」は接続しにくい。

(31) インターネットが世界中で使えるようになってから人々の生活にもまた大きな変化がおこるようになりました。その一つの変化にインターネット新聞があります。(起こりました) (KG141)

(32) インターネットをするためにはコンピューターを使わなければならないので、モニターを見る時間がふえるようになります。(増えます) (KG147)

(31) は上の部分だけ見ていると、長期間にわたる変化のようにも感じられる可能性がある。しかし、原文は以下のものであった。

(33) インターネットが世界中で使えるようになってから人々の生活にもまた大きな変化がおこるようになりました。その一つの変化にインターネット新聞があ

ります。インターネット新聞はさまざまな便利性をもっています。まず、パソコンがあれば、またインターネットができればどこにでも、だだで利用することができるのです。また、誰でも読めるという点もいいところです。(KG141)

(32) は「変化が起こった」ことを述べ、その変化の一つであるインターネット新聞について、その性格を述べており、文脈としては長期間、次第に変化してきたことを問題にしていな。そこで、「変化が起こった」と読んでいいと判断した。

(31)(32)は「変化が起こる」「時間が増える」と変化を内在している。こうした動詞には「よくなる」は接続しにくい。

変化を内在する動詞はそれだけで変化を表現できる。「変化動詞と「変化動詞+なる」の違いは、前者では変化が一回的であるのに対し、後者ではそれが継続的・恒常的である」(庵2000 : 78)と述べられている。進展性を内在する動詞、変化を表現する動詞は一回的な事態ではなく、継続的・恒常的な変化を表現しなければならない。

(34) この半年、体重が5キロ増えました。

? (35) この半年、体重が5キロ増えるようになりました。

(36) 食事や生活習慣が変化して子供たちも体重が増えるようになりました。

### 6.2.3 一般的な事態

科学的な文章では一般的にこのようなことが起こる、と述べることがある。それは社会科学・自然科学などが社会や自然のしくみ・法則を追求する文章だからである。しかし、このような一般的な事態は「る」で表現される(江田 2013 : 29-32)。

(37) 電子の機械でもらう情報だからいろいろの問題ができることがある。モニターで読むので目がはやくぴりぴりといたくなり、集中力も低くなる。そして、記事をスクラップし後で読む時、必ずパソコンを使えるようになる。(使わなければならない) (KG125)

(38) インターネットでニュースを見れば多くの情報\*を私がしらべるほど分ることができます。(中略)もっとはやく、もっと多くのことを分るようになります。

(知ることができます/調べることができます/わかります) (KG116)

先の(31)の例文と同様、(38)について、疑義が出るのが予想されるため、原文を下にあげる。

(39) 科学やきじゅつの発てんにしたがってひとの生活はどんどんらくになりました。図書館や本を見なくても多くのしりょうをしらべることができるし、パソコンだけあれば本当に世界のいろんな情報\*がわかるようになりました。それで今は新聞や雑誌を見なくてもインターネットですべてのことが分るようになりました。「一方では新聞や雑誌\*はいらない」と言いますがそれで本当にいいでしょうか。

インターネットでニュースを見れば多くの情報\*を私がしらべるほど分るこ

とができます。お金や時間もふつの新聞や雑誌\*を読むほどかかってありません。もっとはやく、もっと多くのことを分るようになります。

しかしインターネットでニュースや新聞の記事を読むのは本当の意みで読むのでしょうか。(KG116)

(39) の下線をひいた「ようになる」は最初の3か所は時間をかけておこる変化を述べており、そこでは「ようになる」を使うことは問題がない。しかし、(33) で取り出した第二段落の「ようになる」はインターネットでニュースを見れば時間もお金もかからず多くの情報を調べることができる、ということ述べており、変化の意味は含まれていない。このような例では「ようになる」は不要である。

(37)は記事を後で読む時は必ずパソコンを使う、という一般的な事態を述べており、その場合は「ようになる」では表現できない。(38)はインターネットでは多くのことを知ることができるということ表現しており、こちらも一般的な事態なので「ようになる」はそぐわない。

#### 6.2.4 文の構成

文の文法的な性格により、「ようになる」でなく別の表現を要求する例が見られた。

(40)日本とその文化に接したことが自分が日本語をより深く勉強するようになったのはまちがいないです。(きっかけになった)(KG092)

今回の誤用例の中に(40)の例が見られた。この文は「接したことが～きっかけになった」と「接したこと」をガ格で示しているため、「ようになる」がそぐわなくなっている例である。これが「日本文化に接したことによって」ならば「日本文化に接したことによって日本語をより深く勉強するようになった」という文はまったく問題がない。

他にもいろいろな制限があると思われるが、今回はこの例があった。

#### 6.2.5 一般的な事態の表現と徐々におこる変化の表現

一般的な事態というのはしばしば社会の中で繰り返され多くの人によって共有される事態であるが、それは時間的に見ると徐々に進展する事態と重なりはないだろうか。

(41) その中でも新聞や雑誌のような記事のスピードを重要しするものはそのあり方にウタガイのシセンを集めるようになった。(疑いの視線が集まるようになった/疑いの視線が集まっている)(KG124)

(42)人々はパソコンさえあれば、インターネットをリンクして、たくさんのインフォメーションが得られ、便利だし、速いし、しかも大部のインフォメーションが無料だそうだ。(CG115)

(41)は社会一般の傾向として述べるのであれば「疑いの視線が集まっている」となり、社会変化の中での人々の意識を問題にするのであれば「疑いの視線が集まるようになった」と表現できる。同様に(42)も一般的なこととして表現するのであれば「インフォメーションが

得られ、それは便利だ」となり、インターネットの普及に伴って、という文脈で語るのであれば「多くの情報が得られるようになり、それは」と述べることになる。つまり、一般的な事態として表現するか、進展的な事態として表現するかによって「ようになる」の許容度は異なる。

## 7 まとめと今後の課題

「ようになる」は短時間の変化ではなく、徐々に変化が進展することを表す。安達(1997)の「事態の進展」がもっとも学習者にわかりやすい説明であるということが分った。

変化を表す動詞の「た」は一回性の出来事がある結果に至ったことを述べるのに対し、「ようになる」は時間をかけて徐々に変化したこと、複数の事態の変化によって長期間の変化がおこったことを表す。初級日本語教科書で「ようになる」を主に「技能の獲得」として提示しているのは意味を狭くとりすぎた扱い方と言える。「ようになる」は時間をかけておこる変化を表すアスペクト表現であるとして教育に入れる方が問題が起こりにくいであろうと考える。「ようになる」の位置づけについて再考を検討することを提案する。

「ようになる」の埋め込み文の述語は会話と科学的な文章では分布が異なっていた。会話では可能表現が使われることが多い。それに対し、今回調べた科学的な文章では受け身・意志表現・無意志表現・可能表現の順で用いられており、受け身の多さが目立つと同時に、多様な表現が使われていることが分った。現在の初級教科書では埋め込み文として可能表現を教えることが目立つので、中級の教育では「ようになる」の埋め込み文としていろいろな表現を教える必要がある。

「ようになる」は一回性を持つ意志的な動詞、それ自体が変化を表現している動詞とは使いにくい。変化を表す動詞は「る」「た」で一回性がある変化を表すのに対し、「ようになる」は継続的・恒常的な変化を表す。

「ようになる」と動詞の自他の関係について考察ができなかった。また、文型が「ようになる」を要求する場面があることはわかったが、どのような文型がそれにあたるかは明らかにすることができなかった。この二つの点については、稿を改めて考えたい。

### 注

(1) 社会科学と自然科学で埋め込み文の性質の違いが見られなかったため、共通に科学的な文章の埋め込み文としてまとめた。池上(2001)では「ようになる」の動詞は工学では可能形、農学では受動態、社会科学では能動態が多いと述べており、本稿の調査結果と異なる。本稿は工学・農学のような分類法をしていないため、単純に比較できないが、論文と新書という一般書の違いによる可能性がある。

(2) 学習者作文コーパスは「外国語が上手になる方法について」「インターネット時代に新聞や雑誌は必要か」の二つのテーマで書かれた中国語母語話者・韓国語母語話者の作文を集めたものであり、内容的には科学的な文章に近い。

(3)排除した例は以下のようである。

- ・この辺の人材がしつようになる。(ナ形容詞)
- ・インターネットの資料などをさがす人が多いようになっています。(イ形容詞)

(4) 中級教科書での扱いはこれから調査する。

資料

会話

現代日本語研究会編(1999)『女性のことば・職場編』ひつじ書房

現代日本語研究会編(2002)『男性のことば・職場編』ひつじ書房

宇佐美まゆみ監修『BTSJによる日本語話し言葉コーパス』

科学的入門書 日本語教育支援システム研究会編『CASTEL/J』より

自然科学入門書

井上昌次郎(1988)『睡眠の不思議』、都筑卓司(1991)『時間の不思議』、

中原秀臣・佐川俊(1991)『進化論が変わる』、米山正信(1991)『化学とんち問答』

社会科学

高尾一彦(1979)『近世の日本』、下川浩一(1990)『日本の企業発展史』、

中川剛(1989)『日本人の法感覚』

参考文献

安達太郎(1997)「「なる」による変化構文の意味と用法」『広島女子大学国際文化学部紀要』  
第4号 pp71-84

庵功雄他(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク  
pp75-79

庵功雄(2007)『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク

池上素子(2001)「変化を表す「なる」—学術論文における現れ方について—」『社会言語科学』  
第4巻第1号 pp24-39

池上素子(2002)「「～ようとする」の意味特徴:「～ようになる」「～にくする」との比較か  
ら」『北海道大学留学生センター紀要』6 pp1-20

市川保子(2005)『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク

植松容子(2012)「日本語教育における「ようになる」の扱い—韓国語母語話者を対象とした  
文法記述のために—」『学苑』No864 昭和女子大学 pp30-37

木村英樹(1982)「中国語」『講座日本語学』明治書院 pp19-39

江田すみれ(2013)『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト』くろしお出版

日本語記述文法研究会編(2009)『現代日本語文法』第2巻 くろしお出版

森篤嗣(2011)「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』コアデータにおける初級文法項目  
の出現頻度」『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房